



# JA青年部「ポリシーブック」作成の手引き 2016



全国農協青年組織協議会

平成28年3月31日



# JA青年組織綱領

我々JA青年組織は、日本農業の担い手としてJAをよりどころに地域農業の振興を図り、JA運動の先駆者として実践する自主的な組織である。

さらに、世界的視野から時代を的確に捉え、誇り高き青年の情熱と協同の力をもって、国民と豊かな食と環境の共有をめざすものである。

このため、JA青年組織の責務として、社会的・政治的自覚を高め、全国盟友の英知と行動力を結集し、次のことに取り組む。

## 1. われらは、農業を通じて環境・文化・教育の活動を行い、地域社会に貢献する。

JA青年組織は、農業の担い手として地域農業の振興を図るとともに、農業を通じて地域社会において環境・文化・教育の活動を行い、地域に根ざした社会貢献に取り組む。

## 1. われらは、国民との相互理解を図り、食と農の価値を高める責任ある政策提言を行う。

人間の「いのちと暮らし」の源である食と農の持つ価値を高め、実効性のある運動の展開を通じて、農業者の視点と生活者の視点を合わせ持った責任ある政策提言を行う。

## 1. われらは、自らがJAの事業運営に積極的に参画し、JA運動の先頭に立つ。

時代を捉え、将来を見据えたJAの発展のため、自らの組織であるJAの事業運営に主体的に参加するとともに、青年農業者の立場から常に新しいJA運動を探求し、実践する。

## 1. われらは、多くの出会いから生まれる新たな可能性を原動力に、自己を高める。

JA青年組織のネットワークを通じて営農技術の向上を進めるとともに、仲間との交流によって自らの新たな可能性を発見する場をつくり、相互研鑽を図る。

## 1. われらは、組織活動の実践により盟友の結束力を高め、あすの担い手を育成する。

JA青年組織の活動に参加することによって、個人では得られない達成感や感動を多くの盟友が実感できる機会をつくり、このような価値を次代に継承する人材を育成する。

(注釈)本綱領は、JA全青協設立の経過を踏まえて「鬼怒川5原則」「全国青年統一綱領」の理念を受け継ぎ、創立50周年を契機に現代的な表現に改めるとともに、今後目指すべきJA青年組織の方向性を新たに盛り込んだものである(平成17年3月10日制定)。

## はじめに ～ “作成の手引き” 改訂にあたって～

ポリシーブックの取り組みをJA全青協としてスタートさせ5年が経ちます。

この間、全国盟友のご理解・ご協力により、ポリシーブックは対外的にJA青年組織の代名詞的存在となりつつあります。（事実、JA全青協にはJAグループ内だけでなく、政府・国会議員などからも「今年のポリシーブックはいつできるのか？」というお問い合わせをいただくようになりました。）

何より、各地のJA青年部においては、ポリシーブックの作成・活用について、独自の工夫による取り組みがなされており、そのノウハウも少しずつではありますが、積み上がってきていると言えます。

JA全青協としても、家の光協会地上編集部と連携して、雑誌『地上』にポリシーブックの取り組み事例を適宜掲載いただいたり、平成26年からは“ポリシーブック委員会”をJA全青協内に設けるとともに、毎年3月に「ポリシーブック全国大会」を開催して特筆すべき取り組みをされている組織による事例紹介を行ったりしてきました。

今般、取り組みから5年の節目を迎えるにあたり、JA青年部で独自に進化を遂げてきた「ポリシーブック」を改めて位置付けるとともに、一番重要である単組段階のポリシーブックの作成・活用をサポートする視点から、本手引きを改訂することといたしました。

内容が不十分な点もあるかと思いますが、本手引きを活用いただくことによって、各組織において、改めて役員・事務局、そして盟友一人ひとりがポリシーブックの目的・意義を確認する機会となり、作成・活用の一助になれば幸いです。

なお、個別具体的な取り組み事例については、雑誌『地上』に随時掲載されていますので、あわせてご確認されることをお勧めいたします。

## 理論編

### I. JA青年部とポリシーブック

- 1. JA青年部のアイデンティティ
- 2. 「ポリシーブック」とは何か？
- 3. ポリシーブックの作成プロセスのポイント
- 4. ポリシーブックの“2面性”
- 5. ポリシーブック = 青年農業者が目指す農業と地域のかたち
- 6. JA青年部でポリシーブックに取り組む目的・意義

### II. ポリシーブックの位置付け

- 1. 毎年の「活動計画」との違い
- 2. 各段階のJA全青協ポリシーブックの位置付け

## 実践編

### Ⅲ. ポリシーブックの作成方法

- 1. 事前準備
- 2. グループワークのルールの共有
- 3. グループワークを利用したポリシーブック作成手法
- 4. 「活動計画」への落とし込み

### Ⅳ. 「ポリシーブック発表大会」の取り組み事例に学ぶ

- 1. JA新はこだて青年部の取り組み
- 2. JA静岡青壮年連盟の取り組み
- 3. 宮城県農協青年連盟の取り組み

〔参考〕 新たな農政運動基本方針(平成22年8月)

# 理論編



## I. JA青年部とポリシーブック



## I-1. JA青年部のアイデンティティ

### JA青年部とはどんな組織なのか？

ちょっと遠回りだけど、ポリシーブックに取り組むにあたっては、この問いを考えてみるのが重要だと思う。

皆さんは青年部に入るときに、「JA青年部とは……を目的とした組織だ」と明確に説明されたでしょうか。多くの方は、「先輩に言われて無理やり」であったり、「消防団と青年部は入る“決まり”」であったりして、今に至るのではないだろうか。

実は、JA青年部には、表紙裏に記している“JA青年組織綱領”という崇高な組織としてのアイデンティティがある。

JA青年部の活動は、「盟友の力を結束し綱領の実現をはかる」ことを目的にしていると言える。

もちろん、普段の全ての青年部活動が綱領に適合しているか考える必要はない。

ただ、たまにはゆっくりと綱領を眺めてみてほしいのだ。

## I-1. JA青年部のアイデンティティ

### 農業を通じて環境・文化・教育の活動を行い、地域社会に貢献する

⇒ あくまで、青年部のホームグラウンドは「農業」であり「地域社会」であり、自分自身の農業経営も含めて「農業」と「地域」の将来像をどう描くのかを考えるのが青年部盟友である。

### 国民との相互理解を図り、食と農の価値を高める責任ある政策提言を行う

⇒ 「責任ある政策提言」とは、“国民に理解され”“食と農の価値を高める”政策を提言していくということである。既にある政策をベースにするのではなく、“責任と自信を持って提言できる”政策・制度を考える必要がある。

### 自らがJAの事業運営に積極的に参画し、JA運動の先頭に立つ

⇒ 青年部盟友はJA事業のクレーマーであることは許されない。JAは“自分達の組織”である。JAの出資者(オーナー)として、将来のJAの経営者として、建設的な意見を提言するとともに、組合員の責任としてJAと一緒に事業運営に取り組むのが青年部盟友である。

## I-1. JA青年部のアイデンティティ

### 多くの出会いから生まれる新たな可能性を原動力に、自己を高める

⇒ 青年部の活動は、自分自身と仲間の研鑽の場である。一経営者としてでは経験しないこと、農業者仲間だからできることこそに取り組みたい。将来の地域農業のリーダーとして、JA経営者としての実力を磨いていきたい。

### 組織活動の実践により盟友の結束力を高め、あすの担い手を育成する

⇒ 青年部の活動を通じて、地域の農業者仲間の結束を、世代を超えて築かなければならない。特に、自分たちの世代の後のリーダーを育成することが求められている。

「ポリシーブックとは何か？」は、順次説明していくが、これらがJA青年部のアイデンティティである綱領の実現をはかっていくうえでも、ポリシーブックはこれ以上ないツールであることを頭の片隅に入れておいてほしい。

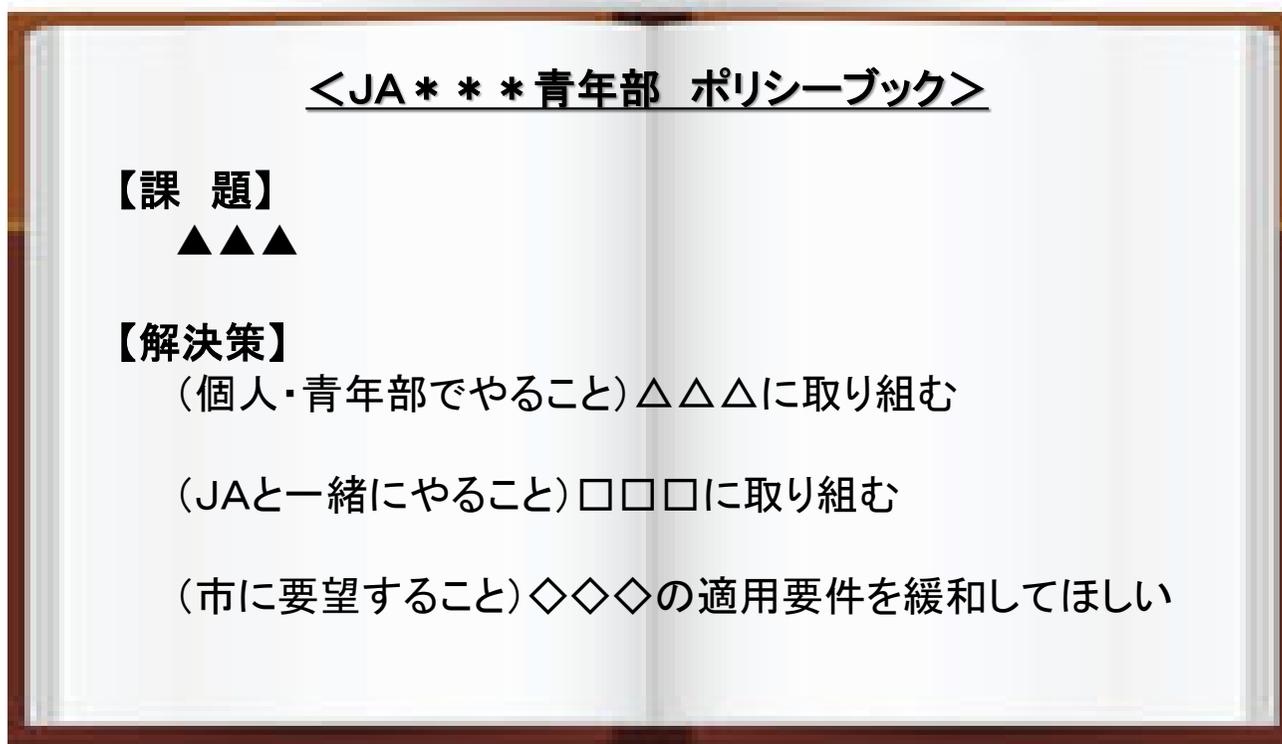
## I-2. 「ポリシーブック」とは何か？

例えば...

- ① 農業経営を行う上で、盟友のAさんには●●●という困ったことがある。
- ② 青年部内で話をすると、他の盟友にも●●●に悩んでいる人がいたが、より本質的には▲▲▲が地域の共通した課題であることが分かる。
- ③ ▲▲▲を解決するためには、とりあえず盟友みんなで△△△という対策を打ってみるのが効果的でないか、ということになった。
- ④ ところが、△△△の実施だけでは効果が薄いようなので、JAに□□□を事業として実施する協力をお願いしてはどうかとなった。
- ⑤ JAに□□□の実施のお願いの相談に行くと、△△△の実施に際して市に適切な制度があり、あわせて活用するのがベターだが、◇◇◇という条件があり容易には使えないことが分かった。

このような状況のときに、ポリシーブックがあったとすると、次のようになるだろう。

## I-2. 「ポリシーブック」とは何か？



これが、ポリシーブックの作成プロセスとアウトプットのイメージである。

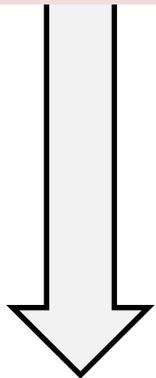
もちろん、これを活用して、▲▲▲や□□□に自ら取り組んではじめてポリシーブックの“完成”となることは言うまでもない。

ひとまず、「ポリシーブック」の完成型のイメージはできただろうか。

## I-3. ポリシーブックの作成プロセスのポイント

ここで、ポリシーブックの作成プロセスのポイントを概説しよう。

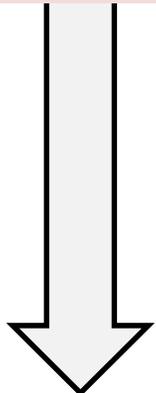
### ① 盟友の課題からスタートする



ポリシーブックのスタートは、あくまで“盟友の抱えている課題”である。もちろん、国際貿易交渉など全国的に大きな課題を農協経営の不安として持っている方も多いただろう。

だが、単組版ポリシーブックに出てくる課題は、そのような“お堅い”課題でなくてもよい。「▽▽▽地域では用水路が詰まりやすい」などといった、身近な課題(困ったこと)をどれだけ出せるか、現行の政策・制度にとらわれない現実の課題をどれだけ出せるかがカギとなる。

### ② 課題の共有化に意義がある



ポリシーブックを上手く活用している組織は、①個人による課題の洗い出しと、②盟友同士による議論、が徹底できていることが多い。

そのような組織の盟友からよく聞くのは「仲間の悩みが聞けたし、自分が悩んでいることは一人だけの課題ではないことが分かった。」という声である。

ポリシーブック未作成の組織は、まずは課題を共有化し、本質的な課題を見つけ出す話し合いだけでもじっくりとやってみてはどうだろうか。

## I-3. ポリシーブックの作成プロセスのポイント

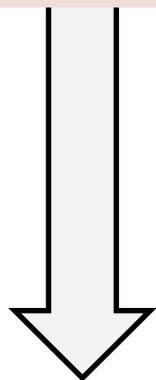


### ③ まずは自分達で取り組むこと

課題が設定できたら、解決策の検討となる。

この際、まずは「自分達で解決することができないのか」を考えることがポリシーブックの最大のポイントである。

逆に言えば、盟友から出てきた課題を共有・整理し「自分達で解決策が実行できるような課題」に設定することも重要となる。

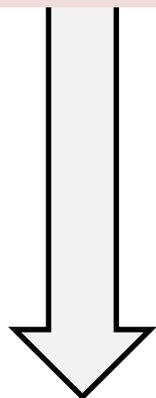


### ④ 次はJAと取り組むこと

自分達だけでは解決できない課題や、JAの協力があつた方が解決に向けてさらに効果があるような場合には、「JAと協力してやること」を次に考える。

JAという“自分達の組織”を上手く活用することを考えるのが、課題解決への近道である。

忘れてはならないのは、「自分達だけで△△△までやるので、□□□と一緒にやれないか」と言うのがポリシーブックであり、JA青年部だということである。青年部盟友・組合員の責任として「何をやるのか」。JAを業者のように使うことだけはやめよう。



## I-3. ポリシーブックの作成プロセスのポイント



### ⑤ 自分達ではどうにもできないことだけ、行政へ要望する

③、④で解決策が出そろえば、あえて行政への要望を作る必要はない。

法律や条例、予算・税制など、行政の力がなければ変えることが難しい問題が課題解決の障害となっている場合には、行政への要望を入れ込む。

ここでも大切なのは、「自分達で△△△、そして□□□をやるので、◇◇◇については行政で何とかしてほしい」と言うスタンスである。

すぐに、制度や予算の問題に帰着しがちであるが、その前に自分達でできる解決策を実践するからこそ、単なる“物乞い的要請”にならない、JA青年部らしい要請といえる。

### ⑥ 「個人・青年部でやること」「JAと一緒にやること」の実践

自分達で作成したポリシーブックに、「やる」と自分達で書いたのだから、しっかり実践しよう。

**行動あるのみ！！**

## I-4. ポリシーブックの“2面性”

作成プロセスの概要で気付いたかもしれないが、ポリシーブックには“2面性”がある。

### (1) “行動方針集”としてのポリシーブック

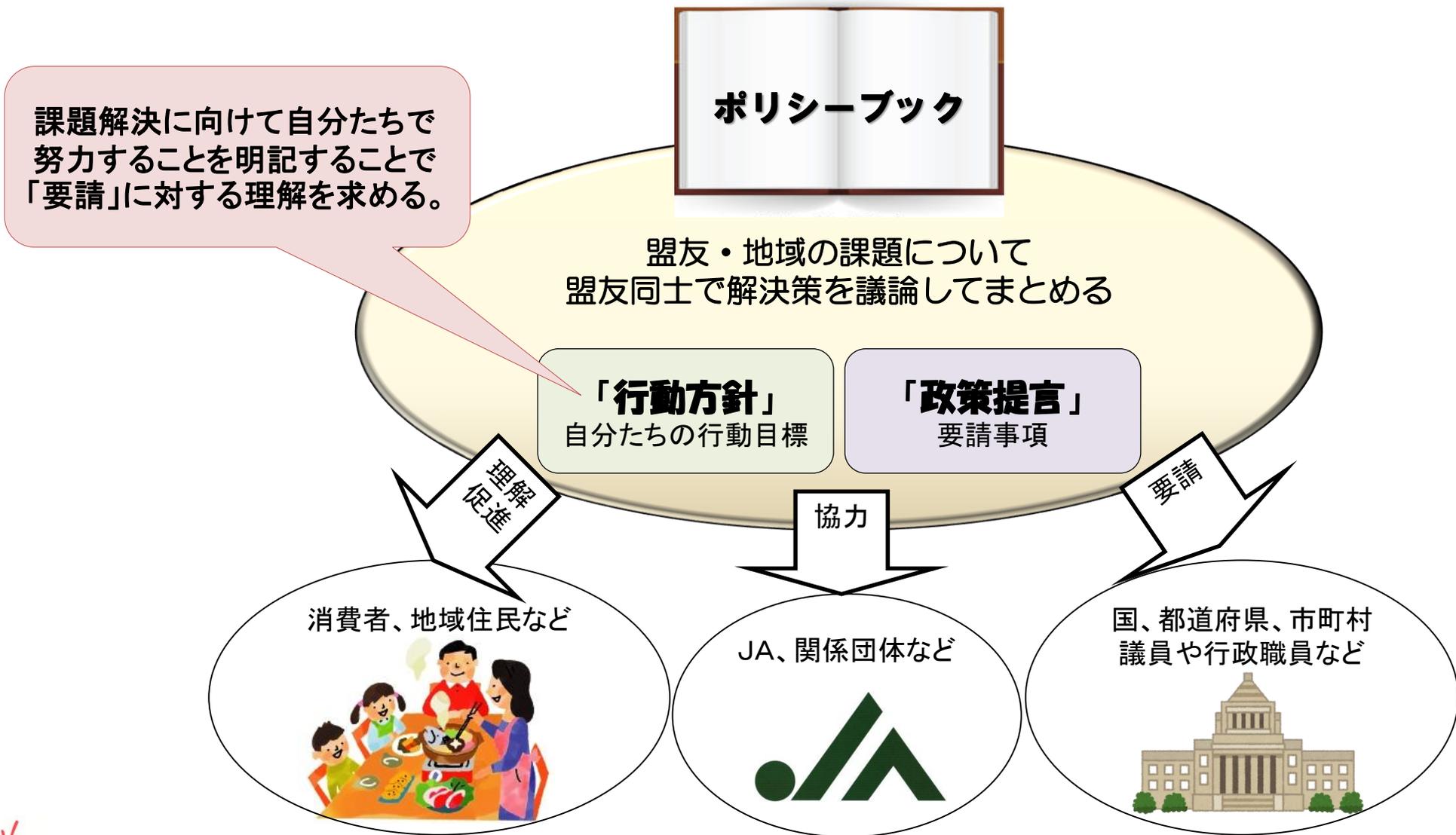
- 一つは、「個人・青年部でやること」「JAと一緒にやること」が記載されているという、**行動方針集**としての側面である。
- これまでJA青年部は農業経営等の課題に対して、JA青年部として方向性を決めて、自ら解決していくということについて、明示的に実施されることは少なかった。どちらかと言えば、JA青年部の活動計画は組織運営上の内容が多く、盟友や地域の課題の解決のためにJA青年部として何をするのか、を具体的に記すことは少なかったのではないだろうか。
- ポリシーブックの大きな目的は、「農業経営・地域社会は厳しい環境にある。…が、若手農業者はその解決のためにこのようなことに取り組んでいる」と胸を張って言うということにある。
- そして、この課題解決に向けてまず自分達が努力をしていく姿を見せることこそが、「また、農業団体が補助金欲しさに要請活動をしてるぞ」などといういわれなき批判を封じ、消費者や地域住民なども含めた幅広い関係者を味方につけ、JA青年部の要請活動に重みを与えることになる。

## I-4. ポリシーブックの“2面性”

### (2) “政策提言集”としてのポリシーブック

- もう一つは、「行政に要望すること」が記載されているという、**政策提言集**としての側面である。
- ポリシーブックをはじめ直接的なきっかけとなったのは、平成21年の政権交代である。政権交代の可能性や官邸主導の政権運営が行われる中では、与野党を問わず国会議員への働きかけが農政運動の取り組みとして重要となる。
- また、農業政策の基本となる部分は制度的に安定していることが重要であり、選挙の度に政争の具とされることは生産者にとっても良いことではなく、超党派的立場で長期プランが構築されることが望ましい。
- このため、農業者の立場から、現場の中の課題をもとに、農業政策について自らの考えを持ち、その政策を支持する国会議員を応援することが、長期的な視点で農業政策に自分たちの意見を反映させ、かつ安定した制度を築くために必要な取り組みとなる。
- そして、「現場の課題をもとに要望が作成されること」により、現行の政策・制度をもとに要望することとは違い、現場を持っているJA青年部の声の重みが出てくることになる。

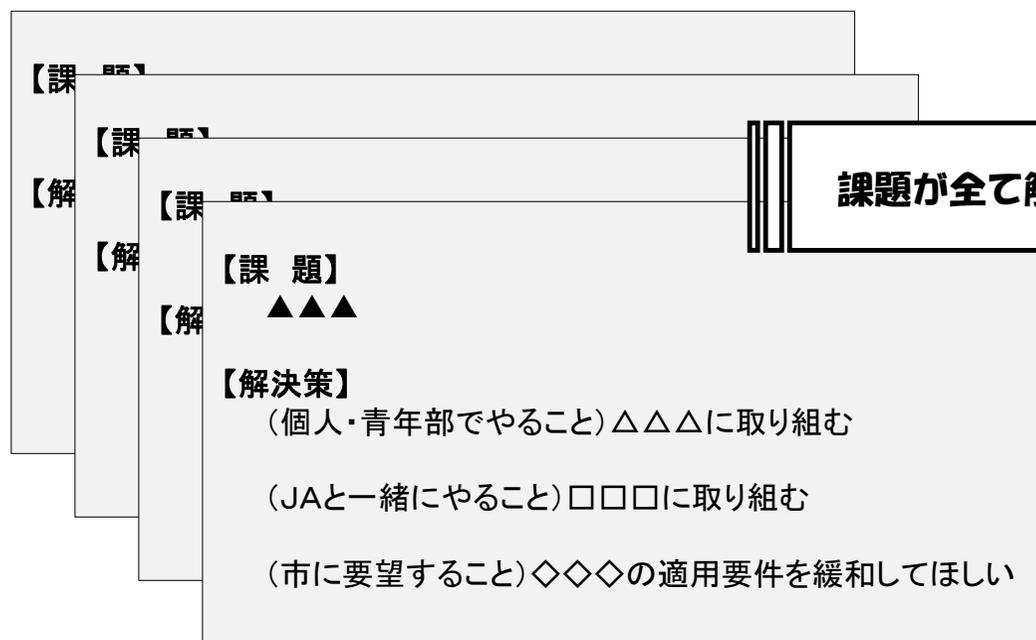
## I-4. ポリシーブックの“2面性”



## I-5. ポリシーブック = 青年農業者が目指す農業と地域のかたち

ポリシーブックは“盟友の抱えている課題”に原点がある。

つまり、ポリシーブックに書かれている課題が全て解決したなら、それは、「農業」や「地域」が、自分たち青年農業者が目指し理想としている姿になっているということになる。



ポリシーブックを作成することは、消費者や地域住民に、自分たちの農業経営も含めて、青年部が思い描く「農業」や「地域」の将来像を示し、共有していくことと一緒になのだ。

## I-6. JA青年部でポリシーブックに取り組む目的・意義

### (1) JA青年組織綱領の実現

ポリシーブックでは、

- 自分自身の農業経営も含めて「農業」と「地域」の課題がスタートとなり、身近な課題解決を通じて、第一義的に地域貢献ができる。
- “国民に理解され”“食と農の価値を高める”政策を提言していくために、行政への要望事項の前に、まず「個人・青年部でやること」「JAと一緒にやること」が記載・実践される。
- JAを“自分達の組織”として、JAと一緒にあって課題解決に取り組む。
- 課題の共有・作成のプロセスなど、一経営者としてでは経験しないことを農業者の仲間同士で取り組む。
- 作成・実践・活用を通じて、農業者仲間の結束を強めるとともに、ボトムアップの取り組みとして若い世代の意見も聴く機会となる。

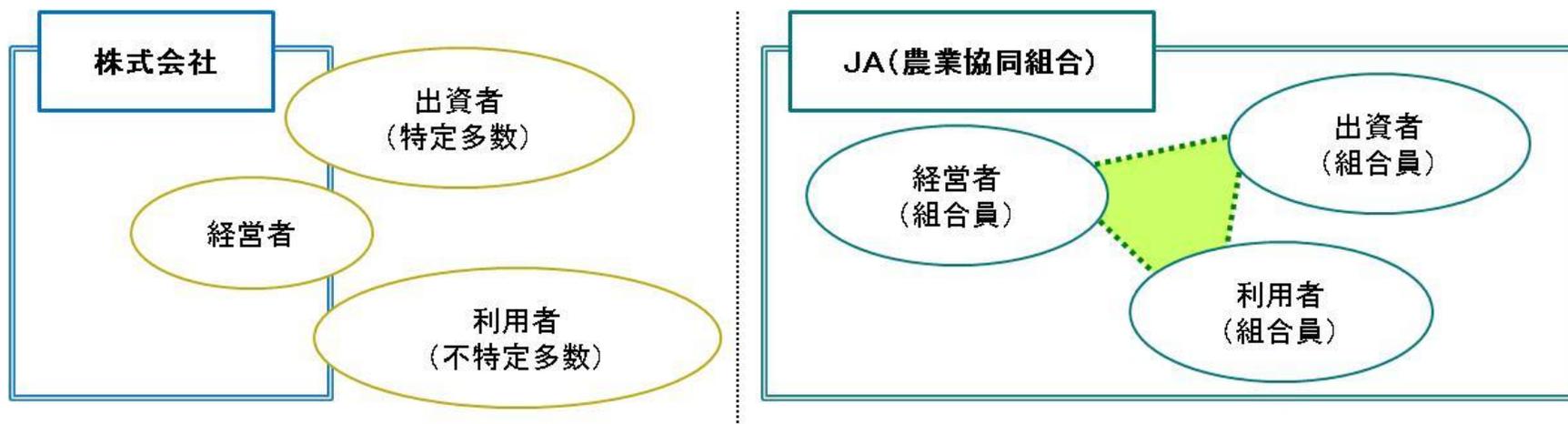
といったことが期待されている。これは、I-1. で説明した通り、JA青年組織綱領に掲げている活動そのものであり、ポリシーブックを上手く活用している組織から「組織活性化のツールとしても最強」と呼ばれる理由である。

## I-6. JA青年部でポリシーブックに取り組む目的・意義

### (2) JA経営者の育成ツール

JA青年組織綱領には、「自らがJAの事業運営に積極的に参画し、JA運動の先頭に立つ。」という表現があるが、これはJA青年部に、JAの将来の経営者の育成機関としての機能に期待が持たれていることの裏返しである。

JA(農業協同組合)は、組合員(生産者)が、利用者＝出資者＝経営者という組織である。



それゆえ、生産者の思いが分かり、地域のリーダーでもあり、JAのことをよく理解している人を、JA管内から探し、JAのリーダー・経営者にすれば、青年農業者の思いを実現することにつながりやすい。

## I-6. JA青年部でポリシーブックに取り組む目的・意義

- だが、そのような人は自動的に出てくるわけではないので、JA青年部として、周囲の生産者の意見をまとめ、皆から信頼され、かつJAのことを勉強している人材を自らの仲間からつくりだすことが、結果として青年部盟友の長期的なメリットにつながる。  
(こういった努力をせずに、「うちのJAはダメだ」と言うのはやめよう。)
- そして、ポリシーブックの作成プロセスというのは、まさにこの人材育成のトレーニングツールであり、JA青年部にJAグループ全体から期待されている役割である。

**生産者の意見調整スキル** ■ ポリシーブック作成時の課題の共有・選択  
解決策の検討

**地域のリーダーシップ** ■ ポリシーブック作成・活用時の旗振り  
課題解決の取り組みの先頭に立つての実践

**JA事業・経営への理解** ■ ポリシーブック作成・活用時のJAとの意見交換

MEMO



## Ⅱ. ポリシーブックの位置付け



## Ⅱ-1. 毎年の「活動計画」との違い

- JA青年部内で毎年立案されている「活動計画」については、組織運営上の大きな方向性（組織としての活動方針等）や、研修・会議等の計画などが記されていることが多い。
- これに対して、「ポリシーブック」は、あくまで盟友一人ひとりの農業現場の課題に対して、どのように解決していくのか、というやや中長期的な課題・解決策の洗い出しツール、さらに言えば、青年農業者が目指している農業・地域の姿が記されたものと言える。
- つまり、JA青年部として解決しなければならない課題、その課題への解決策といった“現場の課題と解決策の積み上げ”がポリシーブックであり、そこに書かれている解決策のうち、今年特に力を入れてやっていく取り組みが書き込まれたものが活動計画、と考えるとどうだろうか。  
※ もちろん、活動計画には通例行事や会議日程などもポリシーブックと関係のない内容も書き込まれるだろう。
- 各組織の状況にあわせて、適切な位置づけをすべきであるが、JA全青協としてのイメージは以下の通り。

## Ⅱ-1. 毎年の「活動計画」との違い

### 活動計画

#### 【活動方針】

- ・ポリシーブックの作成を定着させる
- ・▲▲▲の解決に、重点的に取り組む。

#### 【活動計画】

- ①ポリシーブック研修会を〇月に開催する
- ②「ポリシーブック2016」に書いている  
△△△については、〇月に実施する。  
…については、〇月に実施する。  
…については、〇月に実施する。  
◇◇◇については、〇月に要請する。

重点課題に関する  
解決策の取り組みを  
活動計画へ反映し実践

### ポリシーブック

【課題】

【課題】

【解決策】

【課題】

▲▲▲

【解決策】

(個人・青年部でやること) △△△に取り組む

(JAと一緒にやること) □□□に取り組む

(市に要望すること) ◇◇◇の適用要件を緩和してほしい

## Ⅱ-2. 各段階のJA全青協ポリシーブックの位置付け

### 単組版(支部版)ポリシーブック

⇒ 盟友からの意見を積み上げて作成するポリシーブック活動の基礎となるポリシーブックであり、一番重要であり、JA青年組織全体として最も力を入れるべきポリシーブックである。

このポリシーブック作成のための議論を通じて、草の根(Grass-Roots)の意見集約、および組織活性化を担う。また、JAへの要請や、地元行政への要請などに使用し、地域の実情に最も即したポリシーブックとなる。

### 県域版ポリシーブック

⇒ 単組の意見を集約し都道府県としての意見をまとめたポリシーブックとなる。県別一斉要請活動等において、都道府県選出の国会議員への要請や、都道府県へ要請のなどに使用するポリシーブックとなる。

## Ⅱ-2. 各段階のJA全青協ポリシーブックの位置付け

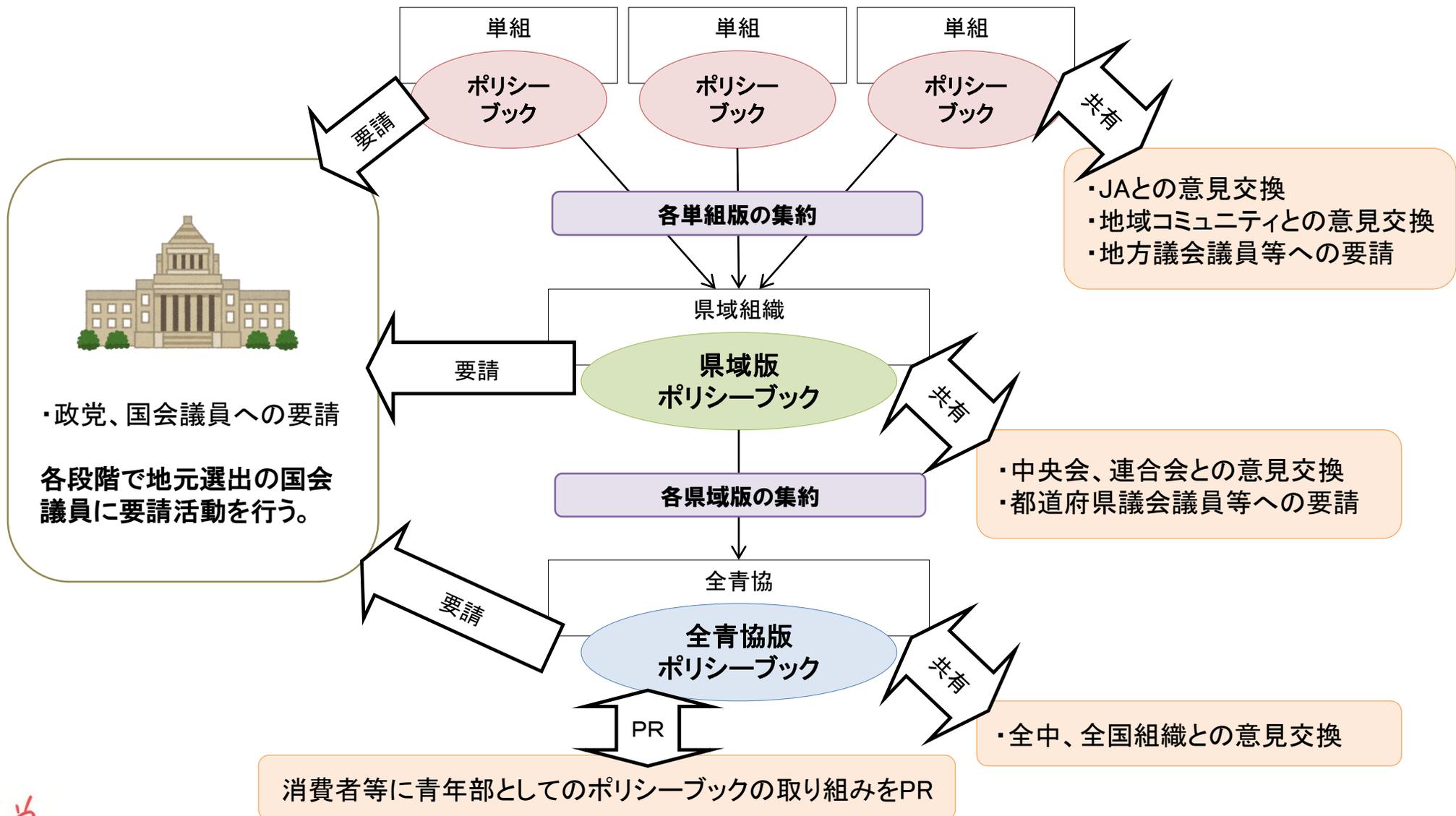
### 全青協版ポリシーブック

⇒ JA全青協のポリシーブックについては、全国組織という立場から、JA全青協の行動方針という側面のほかに、“若手農業者の「白書」としての位置付け”にウエイトを置いて作成しており、ポリシーブックの取り組み自体のプロモーション的役割を持たせている。

全国で若手農業者がどのような課題意識を持っているのかを政府・国会議員や全国的に共有・周知するという位置付けであるため、あえて網羅的・総花的な内容としており、JA全青協として全ての行動方針を実践できている訳ではない。

- 県域組織や単組においては、それぞれ位置付けに工夫はできると思われる。
- 例えば、盟友からの積み上げで一番多数を占めた課題についてのみ、解決策を検討し、確実に実践するといったような手法もあり、この方法で1年ごとに課題を変えていくといったことを実践している組織もある。
- また、「解決策実践用」と「議員要請用」に分けて作っている組織もある。
- いずれにせよ、JA全青協ポリシーブックがポリシーブックの「テンプレート・ひな形」ではないことだけは注意していただきたい。

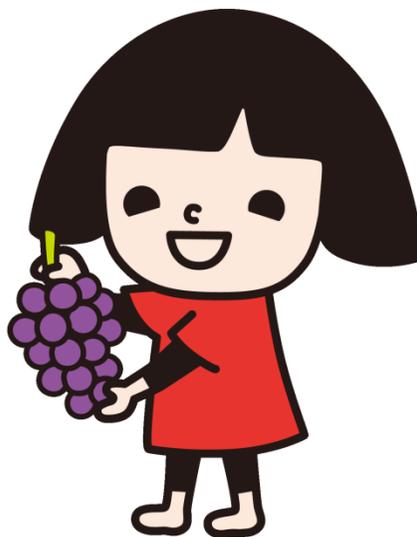
## Ⅱ-2. 各段階のJA全青協ポリシーブックの位置付け



## 実践編



### Ⅲ. ポリシーブックの作成方法



## Ⅲ-1. 事前準備

### (1) 役員・事務局による研修の実施

- 盟友への説明を行うために、ポリシーブックに関する事前学習を役員・事務局で行う。
- 役員・事務局全員が、ポリシーブックの取り組みの意義や目的を共有することが一番大切である。この共有認識の醸成にしっかり時間をかけよう。でないと、盟友にも“やらされ感”が蔓延してしまう。役員・事務局がポリシーブックは“必要だ”と強く思えば、多少のやらされ感があっても盟友はついてくる。
- また、グループワークをリードするリーダーを養成する必要がある。実際の作成過程では役員がグループワークの進行や座長を行うため、そのためのシミュレーションとして、研修会ではグループワークを実際に行い、ただの愚痴で終わらないような建設的な意見を出してもらうにはどうすればよいか、どのように異なる意見を取りまとめているのかという視点で検討を行うことが必要である。

### (2) 盟友向け研修の実施

- 総会・研修会・大会など、多くの盟友が集まる場面で役員や事務局から説明を行い、グループワークの体験などを行いながら、ポリシーブックを作成していくことを説明する。
- 役員からポリシーブックの取り組みの意義や目的をきちんと説明しよう。

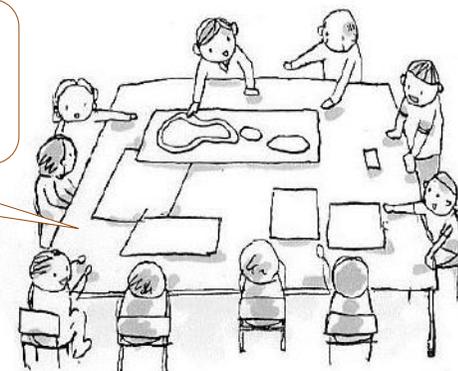
## Ⅲ-2. グループワークのルールの共有

ポリシーブックを作成するために、全青協ではグループワークの手法を推薦している。  
まず、グループワークのルールなどを確認し、参加者と共有しておこう。

### グループワークのルール～その1～

- 意見の批判をしない。
- 話を最後まで聞く。
- 全員が意見を出す。
- 面白い意見に便乗する。
- できない理由を探すより、できる条件を見つける。

Yes, and～ いいね～、さらにこうしてみようよ！  
Yes, but～ いいね～、でもこんなふうにも考えられるかも。



### グループワークのルール～その2～

「意見・アイデアをひたすら出す時間」と「意見・アイデアを一つにまとめる時間」をしっかりと分ける(後述)



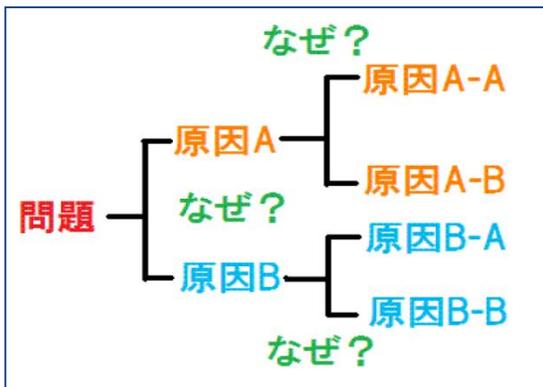
<ダメな例>

「意見」→「批判」→「意見」→「批判」……

## Ⅲ-2. グループワークのルールの共有

### グループワークのルール～その3～

課題・自分の考え・他人の意見などを冷静に分析する、決して短絡的な結論・ステレオタイプな結論に結び付けない



### 課題発見

- 何が課題と感じていたのか？
- 課題が生み出す困るものとは？（川下）
- 課題を生み出すものとは？（川上）
- 時代の潮流、地域課題とは？
- 私たち自身の課題とは？

+

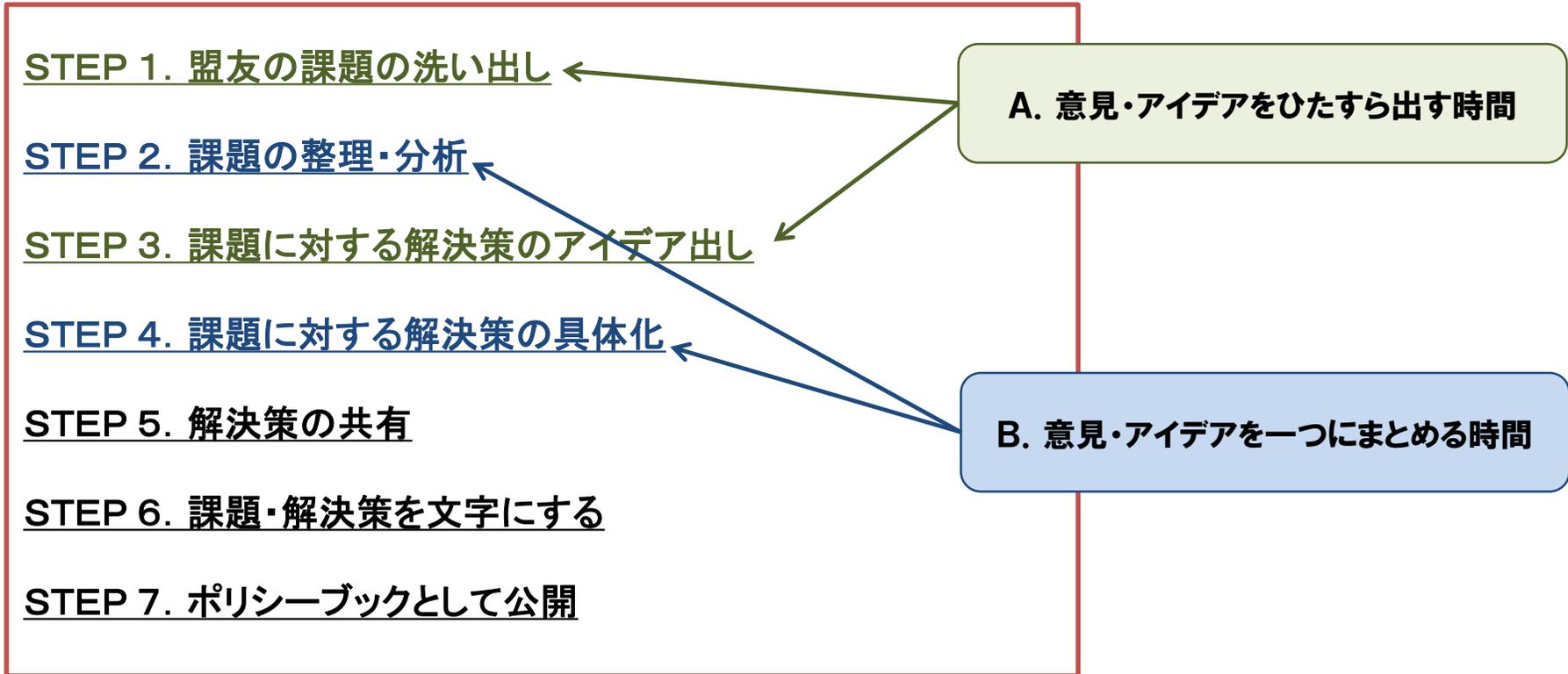
### 課題解決

- 私たちの強みとは？
- 地域の強みとは？
- 社会のニーズとは？
- 新しい方法論はないか？
- モノ・ヒト・カネ・情報をどう生かすか？



### Ⅲ-3. グループワークを利用したポリシーブック作成手法

ポリシーブックを作成するためのグループワークの流れは以下のようになる。



STEP 1～4 について、盟友の参加によってグループワークを行っていくが、大事なポイントは、【A. 意見・アイデアをひたすら出す時間】と【B. 意見・アイデアを一つにまとめる時間】の区別を全員が理解して、各時間帯で頭を切り替えてグループワークに臨むことを共有しておこう。グループワークは見切り発車では、うまくいかない。

### Ⅲ-3. グループワークを利用したポリシーブック作成手法

ポリシーブックを作成するためのグループワークの具体的なすすめ方を解説する。

#### STEP 1. 盟友の課題の洗い出し

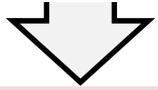
##### 【事前に課題の記入を行う方式(おススメ!!)】

- ① 盟友が日頃感じている疑問・不満や課題を記載できる「課題記入シート」を事前配布する。
- ② 当日までに、盟友は内容を記入し、持ち寄る。  
(可能であれば事前に回収し、役員・事務局が項目ごとにまとめたものを配布する。)
- ③ 記入内容を共有する。(内容の批判をしないこと!)
- ④ (事前に項目ごとにまとめていない場合は)出された課題をグループ化する。

##### 【当日に課題の洗い出しを行う方式】

- ① 付箋に日頃感じている疑問・不満や課題を各自で記入する。
  - ② 付箋に記入した内容をグループ内で発表する。(内容の批判をしないこと!)
  - ③ 各自が記入した付箋を近い意見、関連する意見ごとにグループ化する。
- ※ 事前記入を行わない場合についても、日頃感じている疑問・不満や課題を考えてくるように依頼する。

### Ⅲ-3. グループワークを利用したポリシーブック作成手法



#### STEP 2. 課題の整理・分析

- ① 出された意見の整理やグループ化をする。

このときは、「課題の本質は何か?」「なぜこのような課題が発生するのか?」という切り口で整理をしていく。

また、ただ単に「政治が悪い」「現場を知らない」といった抽象的な批判に終始することなく、冷静に課題の分析を行う。

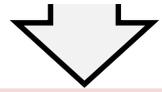
- ② 整理された課題(テーマ)を全員で共有し、グループごとに引き続き議論をする課題を設定する。

全ての課題について議論できる時間があればよいが、多くの場合そんなに時間はないだろう。

そこで、整理された課題を参加者全員で共有し、各グループで引き続き議論をしていく課題を選択する。このときに、重複が起きないように各グループで課題設定する手法と全グループに同じ課題を設定する手法がある。

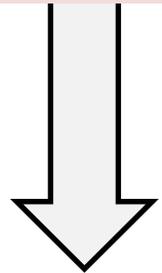
どのようなポリシーブックにするのかを、事前に役員・事務局で協議しておき、どちらの手法を採用するか決定しておく。

### Ⅲ-3. グループワークを利用したポリシーブック作成手法



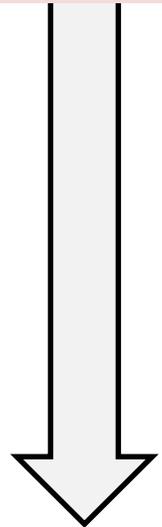
#### STEP 3. 課題に対する解決策のアイデア出し

- ① グループ内で議論する課題(テーマ)に対して、その解決策のアイデアを各自付箋に記入する。
- ② 付箋に記入した内容をグループ内で発表する。(内容の批判をしないこと！)
- ③ 他人のアイデアを聞いて思いついた補足のアイデアがあれば、どんどん出していく。

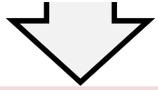


#### STEP 4. 課題に対する解決策の具体化

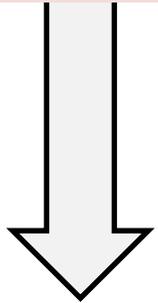
- ① 各自が記入した付箋を近いアイデア、関連するアイデアごとにグループ化する。
- ② グループ化されたアイデアについて、議論しながら具体化をしていく。  
ここが、ポリシーブック作成の一つの山場である。  
課題解決策のアイデアを、「誰が主体となって」「いつまでに」「何をどうすればよい」のか、  
にあてはめて具体化していく。  
このときに、「誰が」という点で、**(個人・青年部でやること) (JAと一緒にやること)**  
**(市に要望すること)**などを明確にしていく。



### Ⅲ-3. グループワークを利用したポリシーブック作成手法

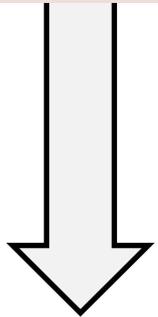


#### STEP 5. 解決策の共有



- ① グループ内で議論した課題および解決策について、参加者全員で共有する。
- ② 可能であれば、発表内容にJAや連合会職員にも聞いてもらい、発表終了後にコメントをもらう。  
もしかしたら、解決策として盟友が提案したものの中には、既にJAなどが取り組んでいるものがあり、盟友が知らないだけかもしれない。

#### STEP 6. 課題・解決策を文字にする



グループワーク終了後、役員や各グループの座長、事務局は、盟友から出された課題と解決策を文字にしていく。

このときに大切なのは、外部に説明することを前提に、JAや行政の担当職員などからヒアリングを行い事実確認をしたり、現行の制度の確認や数字の裏付けを取ったりする必要がある。

#### STEP 7. ポリシーブックとして公開

## Ⅲ-4. 「活動計画」への落とし込み

ポリシーブックは、書いた内容を実践することではじめて“完成”する。

そのため、何を・いつ・誰が・どうやって、実践するのかについて、活動計画に落とし込む作業をおこなう。

- ポリシーブックの課題に対する解決策を全て実現できればよいが、現実的にはむずかしい。
- そこで、重点課題と考えられるものについて、解決策の取り組みを、青年部の活動計画に何を・いつ・誰が・どうやって実践するのかを反映し、年間計画のなかで解決策を実践していくことが必要となる。

※ このように考えていくと、自ら解決策の実施や要請活動の実施について、どのタイミングで実施するのが効果的かがみえてくる。

→ したがって、翌年度以降は、そもそもポリシーブックを作成するタイミングをいつにするのか、考えていく必要性もある。

### 活動計画

#### 【活動方針】

- ・ポリシーブックの作成を定着させる
- ・▲▲▲の解決に、重点的に取り組む。

#### 【活動計画】

- ①ポリシーブック研修会を〇月に開催する
- ②「ポリシーブック2016」に書いている  
△△△については、〇月に実施する。  
・・・については、〇月に実施する。  
・・・については、〇月に実施する。  
◇◇◇については、〇月に要請する。

## 実践編



### IV. 「ポリシーブック発表大会」の取り組み事例に学ぶ



## IV. 「ポリシーブック発表大会」の取り組み事例

○ 平成28年2月17日に開催された「ポリシーブック発表大会」において、3組織より事例報告をいただいた。いずれも先進的な取り組みであり、県域および単組段階での作成、活用に向けて参考となる内容であるため、別冊の資料を参照いただきたい。

### 1. JA新はこだて青年部

「ポリシーブックの取り組みについて ～PDCAサイクルシートの活用による実践強化～」

### 2. JA静岡青壮年連盟

「JA静岡青壮年連盟 ポリシーブックの取り組み」

### 3. 宮城県農協青年連盟

「宮城県農協青年連盟 ポリシーブックの取り組み

～事務局から見たポリシーブックおよび総括評価表の取り組み～」



## 実践編



### 〔参考〕 新たな農政運動基本方針(平成22年8月)



# 1. 新たな政策提言の位置付け・性格

## ① 生産者主導の農政運動を確立しよう。

## ② 自立的な農政運動を確立しよう。

### <現状と課題>

- ・ これまでの農業政策は主に官僚が原案を作成し、その後与党幹部とともに一連の政策決定プロセスに主体的に関与する中で、実質的に与党の意思決定機関で政策が決定されていた。
- ・ そうした中、これまでの青年部の政策要望は、与党幹部や官僚が作成した原案への改善や独自提案の実現を求めて、JAグループが一体となった組織討議を積み上げるというトップダウンとボトムアップの並列型の決定プロセスをとってきた。
- ・ 今、「政治家主導の政治」がうたわれる中、「主導をとる政治家」への働きかけを強めるためには、真に現場から積み上げた政策を与野党に関わらず選出区の政治家に対して盟友自ら伝えていくというよりボトムアップ重視のプロセスに転換させていくことがなによりも重要となる。

### <対応方向>

- ・ このため、「農協青年部の盟友一人ひとりの現場から積上げ」にこだわった政策提言の作成にチャレンジする必要がある。
- ・ さらにそれぞれの青年部が地元オリジナルの政策提言をもとに選出区の政治家との対話を図り、その後の政治家の発言や言動に注意を払い、評価すべきは評価し、必要な問題意識についてはしっかりと伝えていくなど、対話を中心とした継続的な関係を築いていくことが、全国に農政通の政治家を増やしていくための基礎となる。
- ・ また、こうしたボトムアップ型のプロセスにおいてこれまで以上に重要となるのが、現場の生の声をいかに政治家や地域社会に通用する政策提言に昇華できるかということであり、現場のスタッフがその役割発揮がますます重要となってくる。
- ・ また、ボトムアップのプロセスにおいては必ずしもJAグループ全体とは一致しない独自の現場の声が集約されることもあり得る。そうした場合においても運動の生命線である民主的な議論が曲げられることのないよう地元JAと地域の担い手としての青年部の自立性が問われることとなる。
- ・ 財政的基盤を含めてより一層自立した青年部のあり方を追求していく必要がある。

## 2. 政策提言のとりまとめプロセスの重視

### ③ 民主的・公正・誠実な議論・集約を武器に幅広い政党、政治家からの信頼を勝ち取ろう。

#### <現状と課題>

- ・ 地域代表として選出される政治家にとって、地元選出区住民の声をいかに適切に集約できるかは最も重要な課題であり、同様に各政党にとっても農業政策のみならずあらゆる政策について全国の現場の声をいかに適切に集約できるが極めて重要である。
- ・ JA全青協はこれまでも時々の政策課題に応じて組織討議を行った上で政策提言を行ってきたが、実際、組織討議に何人が参加し、いつどのような議論が行われたかについては十分に把握できず、要請の際にもどれだけの議論の積み上げに基づいた要請であるかについて十分に伝えきれていなかった。

#### <対応方向>

- ・ こうした政治家や政党のニーズに的確に対応するために、農協青年部としてできるだけ多数の盟友の参加を得ながら、民主的な議論に基づいた自分たちの政策提言を取りまとめることは極めて有効である。
- ・ これからは、手作りの政策提言を現場から全国に積み上げていくとともに、積み上げのプロセス(できるだけ多くの参加者、事実と実践に基づいた公正かつ誠実な議論、時間をかけた民主的な運営、反対意見も記載した正直な記載)を大事にし、また政策提言を現場、県、全国のレベルで政策集として常に保持することにより、政治家や社会一般に対する青年部のスタンスを明らかにすることが可能となる。
- ・ こうして取りまとめた政策集は政治家や政党にとって無視しえない「現場の声」となるとともに、盟友にとっても自らのスタンスを表明し、地元選出の政治家とのより緊密なコミュニケーションを図るための有効なツールとなる。

### 3. 政策提言を活用した農政運動の展開（応援団の組成）

#### ④ 政策提言を活用し、地域社会をはじめ国民各層からの信頼を勝ち取ろう。

##### <現状と課題>

- ・ 地元選出の政治家は必ずしも農業だけを代表しているわけではない。また、盟友はPTAや消防団、青年団等で活躍しているように地域社会の主要な構成員である。このような地域社会からの信頼を勝ち取ることができるならば、青年部の主張する政策実現に向けての強力な応援団を得ることとなり、政治家からの信頼はさらに強まることとなる。
- ・ 青年部の手作り政策集は内容的には農業政策集となろうが、公的に表明するものであり、単に政治家からの信頼のみならず、消費者をはじめとする社会全体・国民からの信頼を得られるかどうかとも合わせて問われることとなる。

##### <対応方向>

- ・ そのためには、農政活動は地元コミュニティ活動の延長であると位置づけ、地元で起きている様々な課題についても農業者としてしっかりと考え、農業者以外の住民との幅広い連携を追求していく必要がある。地元選出の政治家への要請はこうした活動の実践の裏付けに基づくものとすべきであり、活動の裏付けのない口先だけの要請であっては長期的には信頼を失うことになる。